

家庭科教育の昭和史とともに生きる—宮原小治郎小伝

# 第一部 あるジャーナリストの生い立ち (6)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

## 裁縫教育開眼

小治郎は、一九〇七(明治四十)年秋、『婦女新聞』(第三八八、三九四、四〇〇号)に彼の最初の裁縫教育・裁縫教師論を書いている。三十八歳の時のことである。後年の彼の活躍を知る者には必ずしも驚くべきことではない。しかし、信州教育界に名の知られた中堅の体操教師がまったく専門外の裁縫教育を論ずることは、尋常ではなかった。

小治郎の裁縫教育開眼の直接の契機は、同年八月に県下の松本高等女学校で開かれた裁縫教育に関する女高師教授谷田部順子の講演を聴講し、かつ彼女と面談したこと(『婦女新聞』第三八四、三八五号)にあったように思われる。

この少し前、同じ年の三月に小学校令の一部改正があり、

翌年四月から、当時四年制であった義務教育課程の尋常小学校を六年制に、それに続く高等小学校を二年制または三年制とすることになり、同時に、尋常小学校女児には第三学年から「裁縫」が必修とされることになった。それまでの「裁縫」は、一八八六(明治十九)年以来、高等小学校では女子必修とされていたけれども、尋常小学校ではいわゆる加設科目(学校が開設し得る科目)で、加設された場合も随意科目(履修するかどうかは随意の科目)とされていた。したがって、この〇七年改正は、たんに小学校制度の大改革であるにとどまらず、義務教育課程においてすべての女子に「裁縫」を課すことにしたという点で、「裁縫」教育史の一大画期をなすものであった。谷田部の講演は、この一大画期を迎える小学校の「裁縫」教育の在り方を中心題目としたのである。少なくとも小治郎の関心はそこに向けられていた。

講師の谷田部順子(『女子高等師範学校一覽』等には谷田部じゅんとある)は一八八四(明治十七)年に東京女子師範学校(東京女高師の前身)小学師範科を卒業、爾来母校にあって、渡辺辰五郎、朴沢三代治らによって整備された学校「裁縫」教育の改善に腐心し、当時既に多数の著書を通して「裁縫」教育に大きな影響を与えていた。樋口哲子はこの時期の谷田部の「裁縫」教育論を詳細に研究し、その特徴を特性涵養・人間教育面重視を打ち出し、教材配列の原則、教材

の段階、教式などの形を整えた点に求めている（『家政学雑誌』第三卷第二号、一九七二年）。谷田部の講演を聴いて間もなく小治郎の「裁縫」教育論が書かれたところから見て、この講演はよほど印象深かったものらしい。

#### 若き日の「裁縫」教育論

小治郎の「裁縫」教育（教師）論は、最初に、自分は「年来裁縫科の教育的価値を認むる事に於ては敢て人後に落ちない積り」であり、感ずる所あつて『裁縫教師』と題する冊子を起草してこれを江湖に問うつもりである。これはその論中の一節で、「要は裁縫教師の味方となりて、該科の活動を希ふの婆心に外ならぬ」と、その観点を述べている（この冊子は発見されていない。発刊されなかつたのかもしいない）。

「今や改正小学校令は六学年制度を実施すると共に裁縫科を国民教科の必修科と為したては無いか、既往は追ふべからず、前者の覆轍は後者の戒、今後の裁縫界は大勢力を以て大活躍を為さなければならぬ。女子教育の中心とならねばならぬ。女子訓練の基本とならねばならぬ」、裁縫教師はその将来のために励み勉むべきだというのが小治郎の主張の要旨である（『婦女新聞』第四〇〇号）。

その裁縫教師に小治郎が求めた第一の要求は「教育的の人物」たることであり、「学識が豊富であつて技芸が巧妙であるとしても、若しこの教育的の人物たる一大要素に欠けたな

らば、それは教員でなくして素人である」とさえ言う。しかし「教育的の人物」が何たるかについての説明はない。

次に小治郎は、「教育的の人物必しも教授法に熟練なりとは言えない、教授法は或る意味で一種の技術であるから、これには亦特別の技能を要する」「殊に技芸の教師は他の学科の教師よりは格段の教授力を持たねばならぬ。わけても裁縫科の教授」はそうである。裁縫の教師は、通常の学級のみならず、「聯級単級等は地方に有りがちの事で」、「殊に田舎の補習学級などと来ては、それは想像以外、種々雑多の生徒である」、裁縫教師はこうした状況に対応できる技量を持たねばならぬと言ふ。

また、文部省が示した教授要目実施上の注意に教授は常に訓練と相まって教育の目的を達せよとあるごとく、「裁縫教師たるもの、研鑽修養奮つて一つ此要求を充さねばならぬ」と研修の重要性を説く（第三八八号）。

小治郎はさらに、「教育者は能く世の先覚者となつて、寧ろ進歩の魁を為して欲しい」「強いて反抗を求むるには及ばない」が、「此時此際社会の批判があらうが、更に恐れぬ大なる勇氣が望ましい」とも言っている（第三九四号）。

#### 女兒に好かれていた「裁縫」

制度上の位置は別としても、現実の世界では「裁縫」はどのような位置にあつたのだろうか。

臼井嘉一が、一八九〇年代から一九一〇年代にかけて刊行された各種の教育雑誌の中から、小学校児童の各教科に対する好不好調査に関する一八の記事を拾い上げて検討している。調査規模は一学級対象のものから二千名を超えるものまで区々である。このうち高等科女児を対象とした七つの調査結果は、一つの調査を除くすべてにおいて女児が「好き」と答えた教科の第一位は「裁縫」であった。逆に、高等科女児で「裁縫」を「嫌い」と答える者はほとんどゼロに等しかった（教育内容史研究会『小学校における各教科の内容に関する歴史的研究（Ⅱ）』一九八一年）。他方、尋常科女児を対象とした調査では、「裁縫」を「好き」とした子どもの数は第二位から第四位に分散していた（「裁縫」より上位の教科は、修身、算術、習字、読み方などである）。

一九一（明治四十四）年に東京府教育会調査部が実施した三六校二万弱の児童を対象とした大規模な調査（前掲の臼井論文では取り上げていない）は、「裁縫」を「最も好き」とした子どもは、尋常科低学年では算術に次いで第二位、六学年及び高等科では第一位であった。この調査でも、「裁縫」を嫌いとした女児は非常に少なかった（東京府教育会調査部「教科目に対する児童の評価」『東京教育』第二五九号、一九一一年十一月）。この調査も、非常に多くの女児が尋常科から高等科に進むと「裁縫」が「好き」になることを示してい

る。なお「最も大切」と思う教科は、六学年及び高等科の女児では、修身に次いで第二位となっている。

この時期の子どもたちは、農山村はもちろんのこと、都会の子どもたちもほとんど全部が、母親たちの手縫いの着物（和服）を着ていた。小学校女児は、母親が家族の衣服の調整、補修に多大の時間を費やしているのを日々見ていたのであり、「女として知らねばならぬもの故」「知らぬと人に笑われる故」「御嫁に行っても嫌がられるから」などという答えは、女児が大人の域に近づくにつれて「裁縫」を好むようになる背景を物語っている。

高等女学校生徒に対するこの種の調査は少ないらしく、臼井は一例だけ紹介している（一九一四年調査、対象は五一〇名）。これによると、高女生が好きな教科の第一位は「裁縫」である。もっとも、現今の国語に相当する読書（二・六％）、作文（二・五％）、習字（五・一％）三つを合わせると「裁縫」（一九・四％）を上回ることになる。逆に「裁縫」を嫌いとする者の数は非常に少ない。一事例で一般化はできないけれども、高女生にとっても「裁縫」は好かれる教科の一つであったように思われる。

#### 小治郎の裁縫教育論の背景と特徴

「裁縫」は、女の子たちには格別にか好かれる教科であった。しかし、教育界での位置づけはどうだったのか。

「裁縫」は女子にだけ課される。しかも、この教科の担当者、「裁縫」専科か、正訓導であったとしても女教師だけである。こうした点で、当時なお圧倒的多数を占めた男性教師の目には、義務教育課程の必修教科とはいえ、国民共通の普通教育とは言えない特殊な教科として映っていたのではなからうか。

福沢諭吉は、『婦女新聞』創刊のきっかけともなった「新女大学」の中で、忍従を説く女大学の教訓に反発し、「大節に臨んでは、父母の命を拒み、夫の所業に争うことあるべし」と書いた（山住正巳編『福沢諭吉教育論集』岩波文庫）。彼は女子の教育にも男女の同等を主張し、「女子、少しく成長すれば、男子に等しく体育を専一とし、怪我せぬかぎりは荒き事をも許して遊戯せしむべし」と言っている。その福沢も女子については、「針もつ術（わざ）を習わし」「また世帯万端、もとより女子の知る事なれば」「飯の炊きようはもろろん、料理献立、塩味の始末にいたるまでも、ことごとまかに心得おくべし」と書いていた。福沢においてもまた、女子の教育に特殊性を認めるといふ点で時代の制約をまぬがれなかったと言えよう。

こうした女子用教科の位置づけに「裁縫」教師の悩みがあったに違いなく、またこの点に着眼して教師を励まそうとしたところに、小治郎の裁縫教育（教師）論の特徴があった。

高等女学校が「裁縫」に多くの時間を費やしていることは、宮原小治郎も日々見聞していた。それだけでなく、上田高女には上田女子尋常高等小学校時代の裁縫専修科を引き継いだ技芸専修科があるなど、上田の土地柄は女子の裁縫教育にはとりわけ熱心だったと言えよう。こうしたことを見聞していたのはひとり小治郎だけではなかった。

小治郎が普通の教師とひととき違っていたことは、『婦女新聞』を通して形成された女子教育問題への関心の深さであった。そして、女子教育の在り方一般についてでなく、いわば女子教育の特殊性を体現し象徴している裁縫教育に関心の的を絞り、さらに、高等女学校教師に直接には無縁な小学校令改正という時の動きを敏感にとらえたところに、小治郎の非凡さがあった。この点ではむしろ、実地に体験もしていた女子教育についての小治郎の見解が見られないことを、筆者は残念に思う。しかし、いずれにせよ、小治郎が裁縫教育評論に本格的に乗り出すのは、約二十年後のことである。

ところで『家庭教育』誌復刻版の『別巻』に私が書いた解説に目を通したある読者は、小治郎の裁縫教育開眼、ひいては後年の『家事及裁縫』創刊に妻いくの影響はなかったのかという疑問を呈示してくれた。この点を直接に確かめる材料はない。ただし、記憶の限り妻の影響とは考えられないという近親者の証言があったことを付け加えておく。